

## 英語学概論の評価と課題

安間 一雄

### Evaluation and problems in 'Introduction to English Linguistics'

AMMA Kazuo

#### Abstract

Despite its significance in college-level education in English major especially pre-service teacher training programme, 'English linguistics' has scarcely been studied with respect to students' achievement of learning. Still less found is research in the comparison of such constituent areas as phonetics, syntax, semantics, etc. This survey is based on the author's eight-year experience in teaching and evaluation in 'English linguistics' at Dokkyo University, Saitama, Japan. Answers of 894 students in total to term-final examinations were analysed using 1-parameter Item Response Theory model, and item difficulties and person abilities were calculated. As for the major areas pragmatics, phonology, and syntax turned out to be difficult areas whereas phonetics, morphology, and semantics relatively easy areas. Further research into item-level analyses indicated that students are not good at understanding and handling abstract ideation and generalisation from individual facts. It may partly be ascribed to their possible intellectual development, since students' estimated ability increases as their grades go up. Some means of improving student performance, making their declarative knowledge procedural, are suggested for future education programme.

## 1. 背景+関連研究

「英語学概論」（もしくは「英語学」あるいは「英語学概説」）は英語・英文学を専攻する課程を設置する多くの大学で必修あるいは準必修の扱いであるにもかかわらず、公表されている学生の成績調査は皆無に等しく、さらに英語学内の領域（音声学、統語論など）毎の到達度の事例に至ってはそのような調査対象を見つけること自体が困難である。数少ない先行研究のうち、田中（1996）はアラカルト的内容を改めテーマ学習形態の授業を行ったという実践報告である。ここではテーマ例として「英語の変種」、「書き言葉・話し言葉」、「カタカナ英語」など9項目が想定されているが、実践例として紹介されているのは英語の性差のみで、「概論」の必須構成要件である英語学全般に対する包括的理解を到達目標とはせず、個別の英語現象に対する学生の関心を高めることに主眼を置いている。また、「このように授業を展開する」という計画が記されているに過ぎず、結果の報告部分はない。湯本（2002）は従来型の包括的内容の授業において講義内容を要約させることのメリットを論じているが、領域毎の分析ではない。

多くの大学で「英語学概論」のシラバスは音声学・統語論・意味論などのコア領域を中心とした構成を取っている（例えば蒲池、現影、新垣、中村）のに対し、特定の領域に比重を大きく取ったもの（例えば統語論：平田、英語史：加藤）や一般言語学の分野まで守備範囲を広げたもの（田近）まで様々である。また、講義と文献講読とを組み合わせたもの（内田）もある。現状で英語史を取り込んだもの（加藤、吉田、梅田、大沢）は少なく、昨今策定された英語教職課程に対する行政上の指針である外国語（英語）コアカリキュラム（文部科学省、2017）において学習項目の1つに挙げられていることから、今後領域として加える大学が増えてくるものと思われる。

## 2. 調査対象

2007年度より2015年度に至る8年度に互り国際教養学部兼全学共通カリキュラム科目「英語学概論」（2013年度までは「英語学」）を筆者が担当した（うち2012年度は授業不開講）。これは1セメスター開講の選択科目（国際教養学部 に所属する英語の免許課程学生にあっては必修科目）である。教科書として石黒昭博他『現代英語学要説』（南雲堂、1987、ISBN：4-523-30047-X）を毎年使用した。シラバスは毎年度ほぼ同じであるが、最近の2015年度では英語史を取扱領域に加えた。主要領域は次の通りである（概ね取扱順）。

- ・ 音声学 (Phonetics)
- ・ 音韻論 (Phonology)
- ・ 形態論 (Morphology)
- ・ 統語論 (Syntax)
- ・ 意味論 (Semantics)
- ・ 語用論 (Pragmatics)
- ・ 英語史 (History of English)

本授業の履修登録者数は概ね90～150名である。8年度分を通しての定期試験受験者数、即ち本調査の被験者数の学年毎の内訳は次の通りである（表1）。

表1 被験者数の年次推移及び学年による内訳

| 年度   | 1年生 | 2年生 | 3年生 | 4年生 | 合計  |
|------|-----|-----|-----|-----|-----|
| 2007 | 99  | 28  | 13  | 4   | 144 |
| 2008 | 46  | 17  | 23  | 3   | 89  |
| 2009 | 66  | 27  | 21  | 0   | 114 |
| 2010 | 82  | 41  | 8   | 5   | 136 |
| 2011 | 44  | 35  | 10  | 17  | 106 |
| 2013 | 5   | 22  | 20  | 11  | 58  |
| 2014 | 62  | 49  | 22  | 4   | 137 |
| 2015 | 70  | 17  | 21  | 2   | 110 |
| 合計   | 474 | 236 | 138 | 46  | 894 |

### 3. 分析方法

本授業においては成績評価の一環として期末に定期試験を行った。試験本文の表現は年度により変動するものの、取扱範囲（最近年の英語史を除く）及び問題の難易度はほぼ一定であるため、受講者の成績を経時観測することができた。試験形式は若干の記述問題を除き多肢選択問題である。本論考においては記述問題の成績は除外した。成績として大学に提出して得点とは別に正誤（0／1）による得点を産出し、このデータを用いて項目反応理論による項目難易度の推定を行った。使用したのは統計パッケージ JMP（version 13）である（JMP 2016）。

項目反応理論においては、独立した複数の被験者に跨がる試験を実施するには共通である等化項目を設定し、それを基に全被験者の能力推定を行うが、本授業の場合カリキュラムの都合により各領域の取扱比重が変動したため内容

の共通性が必ずしも保たれなかった。そこで各年度の試験毎に項目難易度を推定し、各項目に割り当てた大項目・小項目のラベルで集約してその項目の成績とした。例えば IPA（国際標音字母）については6年度に互り出題し、各年度の難易度は  $-0.833$ ,  $0.260$ ,  $-0.274$ ,  $0.267$ ,  $-1.610$ ,  $-0.014$  で、これらの平均難易度は  $-0.367$  である。

全ての項目が全ての年度の問題に含まれていたわけではないので、JMPによるデータの積み重ねを行い、欠損値が発生しないようにした。

項目反応理論の適用（JMPでは「分析」→「消費者調査」→「項目分析」）に当たっては、項目識別力の情報は不必要であったので1パラメーターモデルを採用した。

## 4. 結果

### 4.1 主要領域の比較

第2節に挙げた主要領域毎に項目難易度の平均値（ロジットスコア）を算出し、領域間で比較した（図1）。

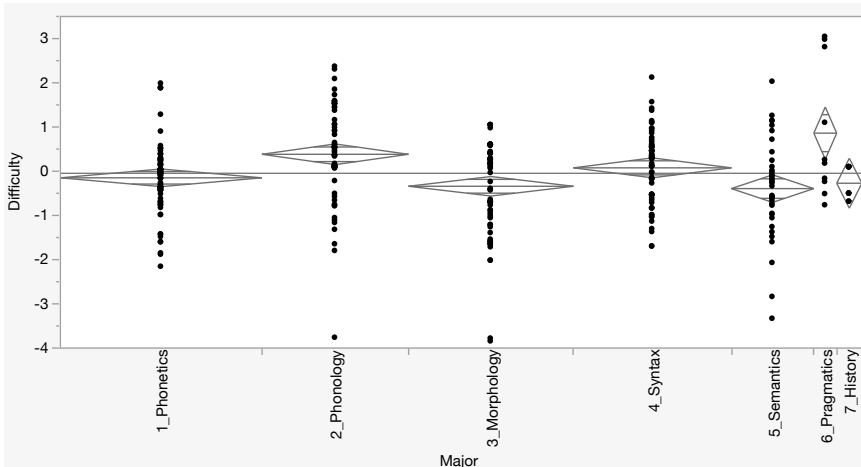


図1 主要領域間の平均値の比較

難易度の低い（易しい）順に意味論，英語史，形態論，音声学，統語論，音韻論，語用論となった。分散分析によれば全体として有意な差の分布を示

し ( $F = 4.453$ ,  $p = 0.0002$ , 自由度対 = 6, 343), 個別に差の大きい組合せに注目すると (Tukey-Kramerによる差の検定), 形態論 - 音韻論 ( $p = 0.003$ ), 意味論 - 音韻論 ( $p = 0.007$ ), 音声学 - 音韻論 ( $p = 0.018$ ) に有意な差があった. 語用論は難易度が最も高い領域であったが, 項目数が少なかった ( $i = 10$ ) ため他のどの領域とも有意な差を示してはいない.

## 4.2 項目の比較

問題項目毎に難易度の平均値 (ロジットスコア) を算出し, 領域間で比較した (図2).

難易度の低い (易しい) 項目のうち, ロジット尺度で難易度  $d$  が  $-1$  以下のものは順に同音異義語 (5Sm22\_Hmph,  $d = -2.85$ , 意味論領域), 生成音韻論 (2Ph82\_GnPh,  $d = -2.020$ , 音韻論領域), サウンドスペクトログラム (1Ph40\_SSpec,  $d = -1.889$ , 音声学領域), 反意語 (5Sm10\_Ant,  $d = -1.574$ , 意味論領域), 省略語 (3Mp20\_Abbr,  $d = -1.536$ , 形態論領域), 語の融合 (3Mp35\_Bld,  $d = -1.460$ , 形態論領域), 頭字語 (3Mp25\_Acrn,  $d = -1.232$ , 形態論領域) であった. 逆に難易度の高い (難しい) 項目のうち, ロジット尺度で難易度  $d$  が  $+1$  以上のものは順に会話の原則 (6Pr90\_CnvP,  $d = 2.937$ , 語用論領域), 自然類 (2Ph70\_NtCl,  $d = 1.619$ , 音韻論領域), 音韻の表層構造 (2Ph86\_Surf,  $d = 1.370$ , 音韻論領域), 統語論の歴史 (4Sx05\_Hist,  $d = 1.323$ , 統語論領域), 口蓋化 (2Ph74\_Plt,  $d = 1.253$ , 音韻論領域), 反対語 (5Sm18\_Cnvs,  $d = 1.132$ , 意味論領域), 多義語 (5Sm38\_Plsm,  $d = 1.132$ , 意味論領域) であった. 以上挙げた項目は何れも他の1つ以上の項目と有意な差を示した.

表2～8に項目の難易度を領域毎に示す.

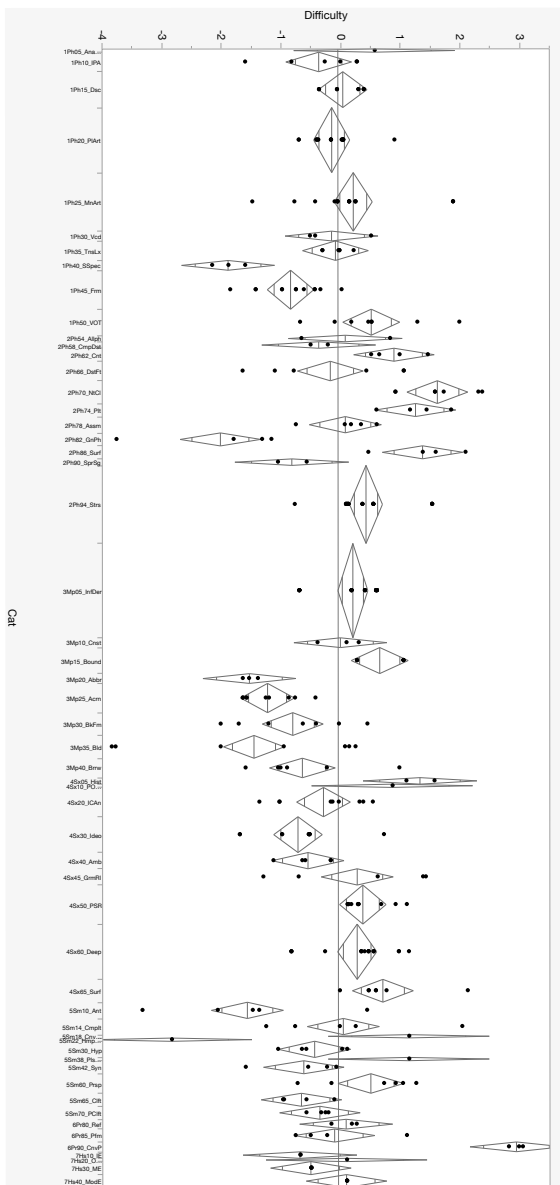


図2 問題項目間の平均値の比較

表2 音声学における項目難易度

| 項目名          | 記号          | 難易度    | 項目数 |
|--------------|-------------|--------|-----|
| 発声器官の名称      | 1Ph05_Anat  | 0.564  | 1   |
| 声帯振動開始時刻     | 1Ph50_VOT   | 0.511  | 8   |
| 調音法          | 1Ph25_MnArt | 0.211  | 18  |
| 音声の記述        | 1Ph15_Dsc   | 0.036  | 11  |
| 緊張音／弛緩音      | 1Ph35_TnsLx | -0.088 | 6   |
| 調音点          | 1Ph20_PlArt | -0.150 | 20  |
| 有声音／帯気音      | 1Ph30_Vcd   | -0.154 | 3   |
| 国際標音字母       | 1Ph10_IPA   | -0.367 | 6   |
| フォルマント       | 1Ph45_Frm   | -0.841 | 12  |
| サウンドスペクトログラフ | 1Ph40_SSPEC | -1.889 | 3   |

表3 音韻論における項目難易度

| 項目名     | 記号           | 難易度    | 項目数 |
|---------|--------------|--------|-----|
| 自然類     | 2Ph70_NtCl   | 1.619  | 7   |
| 音韻の表層構造 | 2Ph86_Surf   | 1.370  | 4   |
| 口蓋化     | 2Ph74_Plt    | 1.253  | 4   |
| 音声の対立   | 2Ph62_Cnt    | 0.891  | 4   |
| 強勢      | 2Ph94_Strs   | 0.421  | 24  |
| 同化現象    | 2Ph78_Assm   | 0.076  | 5   |
| 異音      | 2Ph54_Allph  | 0.075  | 2   |
| 弁別索性    | 2Ph66_DstFt  | -0.176 | 6   |
| 相補分布    | 2Ph58_CmpDst | -0.370 | 2   |
| 超分節音素   | 2Ph90_SprSg  | -0.822 | 2   |
| 生成音韻論   | 2Ph82_GnPh   | -2.020 | 4   |

表4 形態論における項目難易度

| 項目名   | 記号           | 難易度    | 項目数 |
|-------|--------------|--------|-----|
| 拘束形態素 | 3Mp15_Bound  | 0.650  | 8   |
| 派生    | 3Mp05_InfDer | 0.200  | 29  |
| 直接構成素 | 3Mp10_Cnst   | -0.010 | 3   |
| 借入語   | 3Mp40_Brrw   | -0.648 | 6   |
| 逆成語   | 3Mp30_BkFm   | -0.809 | 7   |
| 頭字語   | 3Mp25_Acrn   | -1.232 | 9   |
| 語の融合  | 3Mp35_Bld    | -1.460 | 7   |
| 省略語   | 3Mp20_Abbr   | -1.536 | 3   |

表5 統語論における項目難易度

| 項目名     | 記号          | 難易度    | 項目数 |
|---------|-------------|--------|-----|
| 文法家の名前  | 4Sx05_Hist  | 1.323  | 2   |
| 品詞      | 4Sx10_POS   | 0.856  | 1   |
| 統語の表層構造 | 4Sx65_Surf  | 0.699  | 7   |
| 句構造規則   | 4Sx50_PSR   | 0.364  | 12  |
| 文法関係    | 4Sx45_GrmRl | 0.270  | 5   |
| 統語の深層構造 | 4Sx60_Deep  | 0.269  | 17  |
| 直接構成素分析 | 4Sx20_ICAn  | -0.295 | 9   |
| 統語的曖昧性  | 4Sx40_Amb   | -0.555 | 5   |
| 構造主義    | 4Sx30_Ideo  | -0.723 | 11  |

表6 意味論における項目難易度

| 項目名     | 記号          | 難易度    | 項目数 |
|---------|-------------|--------|-----|
| 反対語     | 5Sm18_Cnvs  | 1.132  | 1   |
| 多義語     | 5Sm38_Plsm  | 1.132  | 1   |
| 前提      | 5Sm60_Prsp  | 0.496  | 6   |
| 語義の相補性  | 5Sm14_Cmplt | 0.035  | 5   |
| 擬似分裂文   | 5Sm70_PCltf | -0.359 | 4   |
| 上位語／下位語 | 5Sm30_Hyp   | -0.446 | 5   |
| 同義語     | 5Sm42_Syn   | -0.628 | 4   |
| 分裂文     | 5Sm65_Clft  | -0.668 | 4   |
| 反意語     | 5Sm10_Ant   | -1.574 | 5   |
| 同音異義語   | 5Sm22_Hmph  | -2.847 | 1   |

表7 語用論における項目難易度

| 項目名   | 記号         | 難易度    | 項目数 |
|-------|------------|--------|-----|
| 会話の原則 | 6Pr90_CnvP | 2.937  | 3   |
| 指示作用  | 6Pr80_Ref  | 0.082  | 3   |
| 遂行動詞  | 6Pr85_Pfm  | -0.112 | 4   |

表8 英語史における項目難易度

| 項目名      | 記号         | 難易度    | 項目数 |
|----------|------------|--------|-----|
| 古英語の屈折   | 7Hs20_OE   | 0.088  | 1   |
| 現代英語の代名詞 | 7Hs40_ModE | 0.088  | 4   |
| 中英語の語順   | 7Hs30_ME   | -0.510 | 4   |
| 印欧祖語     | 7Hs10_IE   | -0.693 | 2   |



### 4.3 経年変化

主要領域の平均難易度の推移を9年間に互り追跡した(図3)。

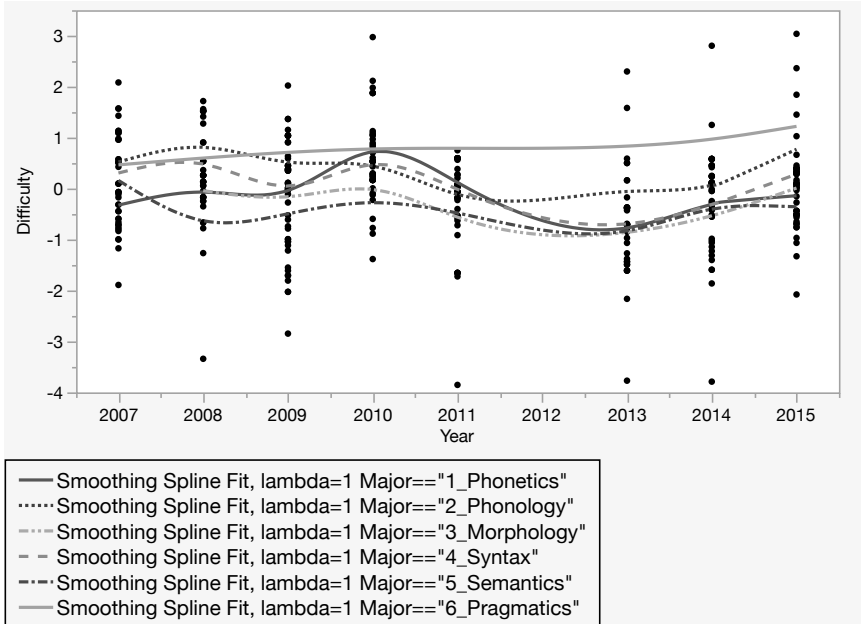


図3 主要領域の平均難易度の推移

2012年度は本授業は不開講であったためデータは存在しないが、年単位の変化を示すために平滑化の対象とした。英語史は最近年である2015年度からシラバスに含めたため、経年変化の対象から外してある。

経年変化を観察するにあたり、スプライン曲線( $\lambda = 1$ )を当てはめた。

全領域の中で、最も難易度が高く最近7年間に互り最高難易度を維持しているのが語用論である。音韻論がこれに次ぎ、最近4年間で第2位に位置している。一方最も難易度が低かったのは意味論で、全期間を通して下位から1乃至2位に位置している。形態論がこれに次ぐ。

9年間に互る難易度変化を概観すると、語用論・音韻論以外は難易度が2013年度に下げ止まり、その後最近3年間でやや上昇する傾向がある。2013年度に難易度が下がった、即ち受講者の能力が上がったのは、偶々この年度の受講者

のうち1年生が少なかった(表1)ことが原因と思われる。実際、8年度間全体で学年による能力尺度の平均値の比較を行うと、1年生と2年生の間( $d=0.248$ ,  $p=0.002$ )及び1年生と3年生の間( $d=0.285$ ,  $p=0.009$ )に有意な差があることが判明した。ここでの $d$ は難易度と同じロジット尺度で表した差である。なお、8年度間で再履修者が24名、再々履修者が1名いたが、これらの数は絶対的に少なく、再履修乃至再々履修が能力尺度に影響を及ぼすことはなかった。結局、学年が上がることで知的成熟が伴い、本授業の理解度が増したと考えられる。

## 5. 考察とまとめ

### 5.1 主要領域の比較

有意差対で見える限り、音韻論が最も難易度が高い領域である( $d=0.383$ )。同様に音声に関わる領域でありながら比較的難易度が低い音声学( $d=-0.149$ )との対比が生ずるのは、音韻論が音素・弁別素性・音韻規則といった抽象的概念を多用するのに対して、音声学では調音・音響といった具体的事象を扱うことに起因していると思われる。前者では思考力が問われるのに対し、後者では単純な用語の理解が目標である。同様の対比は統語論( $d=0.077$ )と形態論( $d=-0.340$ )にも見受けられる。統語論が構造とその一般化規則を扱うのに対して、形態論では主として語形成の名称が学習事項であったため、ここでも抽象対具象の思考負荷の差が現れたと考えられる。意味論( $d=-0.393$ )においても語の意味の分類名称(同意語・反意語など)の把握は受講者には容易であったと考えられる。

### 5.2 項目毎の特徴

#### 5.2.1 音声学における項目の特徴

音声学においてやや難易度が高かったのは発声器官の名称と声帯振動開始時刻である。これらは概念は単純ながら何れも解剖学及び物理学の知識及び思考方法が関わる点で文化系の受講者には馴染みが薄かったかも知れない。声帯振動開始時刻と同じ音響音声学でもフォルマントとサウンドスペクトログラフが容易であったのは、実際の試験では用語を選択肢から選ぶ形態であったためと考えられる。

### 5.2.2 音韻論における項目の特徴

自然類・音韻の表層構造は共に個別の事象をまとめて一般化するという抽象作用を伴うものである。これらも選択肢から用語を解答する形式であったが、概念把握が容易ではなかった可能性がある。口蓋化は音声現象そのものの理解とそれを表す発音記号での表記に理解が不十分であったと思われる。これは教科書に明示的に説明してあり、授業時にも現象を解説したことだが、質問がなくとも教師側は積極的に問いかけて理解を確認しなければならないということであろうか。一方最も難易度が低かった生成音韻論は前後の文脈から推測可能で、且つ他の錯乱肢が高難易度語であったため、特にこの概念の理解が要求されなかったと考えられる。

### 5.2.3 形態論における項目の特徴

形態論の内容は5.1で述べたように、英語の例を基に派生・屈折などの用語を理解することが主であったため、記憶力をテストする形となった。別の授業「言語学b」で行っているような、未知言語の資料から意味を手掛かりに形態素を推測するような学習内容であれば実態は異っていたはずである。

### 5.2.4 統語論における項目の特徴

文法研究の歴史的事項として尋ねた文法家の名前の項目が最も難易度が高い結果となった。これは指示文に記した概念の用語（教科書には記してあるが授業では特段説明しなかった）が理解困難を来した可能性がある。直接構成素分析・深層構造・表層構造といった構造解析の基本概念には大きな困難さはなかった。一方構造主義文法と生成文法の理念と問題点を問うた項目では軒並み得点が低かった。これらは教科書には書かれておらず教員が授業中に補足説明した事項である。

### 5.2.5 意味論における項目の特徴

意味論の項目は全般に難易度が低く、意味関係の概念を問う項目のうち反対語と多義語に関するものが難易度1を超えた程度である。

### 5.2.6 語用論における項目の特徴

語用論は3項目しかないが、特に会話の原則に関わるものの難易度が高かった。ここでは状況を説明する新規の文章を読ませ、4原則のうちどれが最も大

きく当てはまるかを問うものであった。原則の名称の表面的な理解だけでは事例に対して応用することが困難で、かつ会話の原則そのものが境界線が曖昧であることがこのことに拍車を掛けたと思われる。この種の相対的中心を持つ概念に関しては事例を複数挙げ、それぞれ選択肢群の中から解答を選ばせる形式の方が信頼性が高くなる。

### 5.2.7 英語史における項目の特徴

英語史は2015年度のみの出題である。難易度の高い項目はなく、主要事項の歴史的流れもよく捕捉されている。

## 5.3 総括

今回の調査全般を通して痛感するのは、受講生の抽象的思考能力の低さと共に積極的学習姿勢の欠如である。教科書に記載説明されている事柄についてその用語を暗記することはできるが、事象の本質的理解のために自ら反芻考察する習慣が形成されていないのではないかと。抽象化能力は知的能力の一環であるので(例えば Gardner 1993)発達段階と共に向上すると期待されるものであるが、学習の動機付け、特にメタ学習ストラテジーの実践は学習者が制御可能なものである。眼前にある滋養物を教師が匙で与えない限り自ら摂取しようとしないのであれば、所謂アクティブラーニングは到底おぼつかない。

用語の選択を直接問う問題項目においては正答率は比較的高いが、応用的課題における正答率の低さは学習が表面的且つ断片的であることを物語っている。今回は分析の対象から外したが、記述形式の項目は解答率そのものが低く、学習事項が宣言的知識に留まり操作知識(DeKeyser 1998, 2001)に移行していないことを示している。定期試験においては授業で扱ったあるいは教科書に収録されている事項がそのまま出題されるとは限らない。応用ができなければ死んだ知識である。授業では教科書の章(主要領域)毎に練習課題を課し、より深い本質的理解に繋がるよう試みている(例えば「音韻現象の説明に弁別素性を用いることの利点は何か?」、「次の各文の深層構造を表示せよ」など)が、受講者はこの段階で理解が不十分であることに気付いても学習内容の見直しに繋がる活動を起こしていないのではないかと、あるいは理解が不十分であるとの認識そのものが欠如しているのではないかとと思われる部分がある。

以上が現状の問題点であるならば、そこに焦点を当てた教授活動が今後の課題となる。応用力の強化の場合、用語説明の時間を割いたとしても練習課題

を多くして問題解決型学習の機会を与えるべきであろう。一口に練習課題と言ってもいくつかの段階があり、(1)用語の定義を当てはめるもの(例えば「有声子音と無声子音は音響音声学的にはどのような違いがあるか?」)、(2)既習事項を別の視点からパラフレーズさせるもの(例えば「第1フォルマント・第2フォルマントは母音の発音とどのように関連するか?」)、(3)学習内容を用いて自らデータ収集・分析をさせるもの(例えば「声門閉鎖音が発生しうる英単語の例を挙げよ」)など、学習者の主体的関与を支援する足場作り(scaffolding)が必要になるであろう。

### 参考文献

- DeKeyser, R. M. 1998. Beyond focus on form: Cognitive perspectives on learning and practicing second language grammar. In C. J. Doughty & J. Williams (eds.), *Focus on Form in Classroom Second Language Acquisition*. Cambridge: Cambridge University Press, pp.42-63.
- DeKeyser, R. M. 2001. Automaticity and automatization. In P. Robinson (ed.), *Cognition and Second Language Instruction*. Cambridge: Cambridge University Press, pp.125-151.
- Gardner, H. 1995. *Multiple Intelligences: The Theory in Practice*. New York: Basic Books.
- JMP (version 13.0). 2016. Cary, NC: SAS Institute, Inc. URL: <http://www.jmp.com/>
- 田中実. 1996. 「英語学概論」を担当して. 『関学教職教育』第1号, pp.89-97.
- 湯本和子. 2002. 英語学の授業改善と授業評価. 『大学英語教育学会第41回全国大会要綱』.

### 参考資料 (以下のシラバスは全て2017年11月閲覧)

- 新垣實. 英語学概論 [沖縄国際大学シラバス].  
<http://www.okui.ac.jp/gakumu/kogigaiyo/gaiyo/h14003000000071.html>
- 内田政一. 英語特別研究 I. [名古屋短期大学シラバス].  
<http://www.nagoyacollege.ac.jp/syllabus/2016/senei/517.pdf>
- 梅田紘子. 英語学. [武蔵野学院大学シラバス].  
<http://www.musashino.ac.jp/content/files/mgu/%E8%8B%B1%E8%AA%9E%E7%A7%91%EF%BC%88%E5%B9%B3%E6%88%9025%E5%B9%B4%E5%BA%A6%E3%81%8B%E3%82%89%E3%80%80%E6%95%99%E7%A7%91%E3%81%AB%E9%96%A2%E3%81%99%E3%82%8B%E7%A7%91%E7%9B%AE%E3%81%AE%E3%82%B7%E3%83%A9%E3%83%90%E3%82%B9%EF%BC%89.pdf>
- 大沢ふよう. 英語学概論B. [法政大学シラバス].  
[https://syllabus.hosei.ac.jp/web/preview.php?no\\_id=1605621&nendo=2016&gakubu\\_id=%E6%96%87%E5%AD%A6%E9%83%A8&gakubueng=AB&radd=500](https://syllabus.hosei.ac.jp/web/preview.php?no_id=1605621&nendo=2016&gakubu_id=%E6%96%87%E5%AD%A6%E9%83%A8&gakubueng=AB&radd=500)
- 加藤とも子. 英語学概論 [日本福祉大学シラバス].

[https://www.n-fukushi.ac.jp/syllabus/syllabus2015/kokusai\\_kamoku/170\\_GA198001.html](https://www.n-fukushi.ac.jp/syllabus/syllabus2015/kokusai_kamoku/170_GA198001.html)

蒲地賢一郎. 英語学概論 [志學館大学シラバス].

[http://www.shigakukan.ac.jp/student/upload/kougi2013\\_248.pdf](http://www.shigakukan.ac.jp/student/upload/kougi2013_248.pdf)

現影秀昭. 英語学 [埼玉学園大学シラバス].

[http://www.saigaku.ac.jp/wp-content/uploads/syllabus/2017/syllabus\\_h/28\\_ningen.pdf](http://www.saigaku.ac.jp/wp-content/uploads/syllabus/2017/syllabus_h/28_ningen.pdf)

田近裕子. 英語学概論. [開智国際大学シラバス].

<http://www.kaichi.ac.jp/board/syllabus1/eca/e142.pdf>

中村洋一. 英語学概論 [清泉女子短期大学シラバス].

<http://www.seisen-jc.ac.jp/syllabus/kamoku/t/k0192.html>

平田一郎. 英語学概論 1. [専修大学シラバス].

<http://syllabus.acc.senshu-u.ac.jp/syllabus/syllabus/search/SyllabusInfo.do;jsessionid=6C21A4A853164EFE98AC926FD06BA7B6?nendo=2016&kogikkey=28330&setti=1>

文部科学省. 2017. 教職課程コアカリキュラム案.

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/002/siryu/\\_jicsFiles/afielddfile/2017/07/20/1387656\\_08.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/002/siryu/_jicsFiles/afielddfile/2017/07/20/1387656_08.pdf)

吉田論史. 英語学概論 A. [東京音楽大学シラバス].

<http://www.tokyo-ondai.ac.jp/gaiyou/shirabasu/2017contents/contents/p334.pdf>